

プロゴルファー

古市忠夫

Tadao Furuchi

大きな災害に見舞われたとき、人々は希望を失う。だが、そこで諦めずに努力し続けなければ、復興や再生は望めないだろう。また、手を差し伸べてくれた人々への感謝の心を忘れることなく、次に自分が手を差し伸べる気持ちで新しい扉を開くことだろう。

阪神・淡路大震災で自らも被災しながら、長田区若松町一丁目目の復興に力を尽くした古市忠夫さんは、町内会長として忙しく復興のために働きながら、ゴルフのプロテストを受け、見事に六〇歳目前で合格した。現在もプロゴルファーとして活躍しながら、明日への希望と、まわりへの感謝の心を持ち続けることの大切さを説き続けている。

「一番大事なのは感謝力」

震災後の町づくりを力尽くして

—— 阪神・淡路大震災から一二年を経て、ここ長田区鷹取商店街はいち早く復興を果たしたように見受けられます。区画整理が行われ、

道路も消防車などが入ってきやすいように広がりしました。防災用の貯水タンクなども整っています。

ただ、目に見えないところでの「心の復興」については、まだわからない部分があります。地震発生時の町内会長だった古市さんをモデルにした映画『ありがとう』を拝見しましたが、当時の悲惨な状況はほぼそのまま再現されているそうですね。

古市 そう、ほとんどそのまま。だけど実際のほうがもっと大変やったところも多いな。そのまんま描写すると、かえってフィクションみたいになってしまうから、抑えたところもあったんよ。最近大地震が多いから、みんな地震が怖

いってことは百も承知しとるやろうけど、地震から出てくる火災の恐怖はもっともつと強い。

長田区では、生きている人間が目の前で死んでいった。映画の中で、奥さんがつぶれた家にはさまれているのを助け出そうとする旦那さん（豊川悦司さんが演じた）

のそばまで、火が迫ってくるシーンがあったやろ。それを必死で赤井英和さん、つまり僕の役やけど、彼が羽交い締めにして引き離すやんか。あのシーンなんか、今でも忘れられへん。実際にあってんから。身動きできない奥さんが「お父さん、逃げてー！ 子供頼むよー！」って叫んで。もう火がそこまできとんのよ。

—— 長田区は文字通り焼け野原になりました。恐らく、同じような悲劇がたくさんあったことでしょう。

古市 消防署や警察だって手のつけようがなかった。愛する町を守るのは自分たちなんやって、身に沁みてわかった。ああいうことは二度と繰り返したくない。親友の墓標の前で、町を守るのはわれわ

人の醜さ、素晴らしさを見た

れやと僕は誓ったわけや。だからやってる。今でも月に一回、地域の住民でつくっている市民消防隊の防災訓練をやんねやで。もうこの七月で六三回目。年に一回じやだめ、すぐ忘れるから。

—— 町の再興に取り組まれたときも、議論百出、なかなかまとまらなかつたとうかがっています。特に道路を広げるためにそれぞれ土地を提供してもらったのが大変困難だったようですね。まとめ役だった古市さんが「行政の回し者！」と罵倒されたり……。町の再興をしたい気持ち

ちは同じでも、抱えている事情はさまざまだったでしょう。

古市 難しかったねえ。経済的なもん、年齢的なもん、みんなさまざまやから。だって、自分でななほ頑張ろうとしても、お金がなか

ったら頑張られへん。家、建てられへん。この辺は借りて住んでる人も多かつたから、いくら長年暮らしていたとしても、土地がなかったら出て行くしかないよね。実際、歳をとって土地がない人なんかみじめなもんよ。モノ言わしてくれへんのよ。「おまえら、土地とられへんねやろ。家も土地もないやないか。何も無いのに、何ぐちゃぐちゃぬかしよんじや」って。だけど、彼らだって長年ここで暮らしてきた仲間やないの？ そういう人たちも含めて、僕が権利部会の部長、町づくり復興の副

会長をして、権利部会では弁護士を呼んできて勉強会をしたり、いろいろやりました。

——土地を持つている人にすれば、わずかでも道路整備のために土地をとられるのは不愉快だったんでしょね。しかし、多くの人はなんとか災害に強い、いい町をつくりたいと思ってい

らしたはずですよ。その気持ちをまとめるご苦労は大変なものだったと思います。混乱に乗じて、いろいろなエゴを通そうとする人もいたでしょうね。

古市 ここぞとばかり、人をだましてというのおつたし、自分の田んぼに水引くようなことをやろうとしたもんもおつた。醜い人間も見たし、素晴らしい人間も見たよ。みんな復興に向かって必死だった。

強するしかない。それでちゃんと住民に説明して、「行政と一緒に手をつないで復興することが、亡くなった人への鎮魂と違いますか？」とやった。七月二日やったな。議論が紛糾したとき、それなら決を採りましょと、僕が判断して言ったんよ。オブザーバーで入った大学の先生がびっくりして、「ダメ！」のサインを送ってきたけど、無視してやったんや。僕たちのまとめた案に賛成してくれるのかどうか。少しずつ手が挙がっていった、最後はみんなの手が挙がった。

——一時はどうなることかと思われた時期もあったでしょう。

古市 うん。だけど、震災から半年でああいう結果が出た。この近くで、まだ区画整理ができていない地域もあるんよ。こっちはなんとか町を再興できた。長田区全体

では人口が減つとんのやけど、このあたりはマンションが三つ建つて、若い人が増えてきた。小学校の生徒数も増えて、教室が足らんぐらい。嬉しいことですよ。

僕は震災に遭う前に地域でみんな遊んでおくことが大切だと思

還暦プロゴルファーを生んだ奇跡

うんや。盆踊りをしたり、運動会、

——お話をうかがっておりますと、古市さんにゴルフがなかったとしたら耐えられないような過酷な日々だったという気がします。町内会長として奮闘されながら、ほとんど練習もできないままにゴルフのプロテストを受け、二回目で合格されました。「還暦のプロゴルファー」として大変な話題になりましたね。

古市 正確には還暦直前やったん

カラオケ大会とか、コミュニティでいろんなイベントをして遊ぶことが防災につながるし、復興に向かつて駆け登る力になるんやないか。盆踊りひとつできないコミュニティに防災組織は存在しないと思いうけどな。

やけど(笑)。ま、奇跡やね。僕、講演でよく言うんやけど、みんな才能、努力、運で人生を生きるわけやんか。だけど、その三つだけで人生が動いていくと思つと、絶対足をすくわれるね。最近多いやろ、人生の絶頂期で失敗する経済人が。うぬぼれて、もつともつとと欲が出る。最後にはもう法を犯してでも欲を満たそうとなつていくんよ。





古市氏は、ゴルフ場でラウンドする前と後に必ずコースに向かって一礼する。たくさん球を打つより、ゴルフができることに心から感謝することで、不思議と結果があとからついてくるという。「ゴルフは心の格闘技」が持論（写真提供：共同通信社）。

才能、努力だけではあかんねん。一番大事なのは「感謝力」なんや。これがあると、法を犯すということはない。みんなのおかげやねんから。「才能+努力+運」ではあかんねん、「才能×努力×感謝力」でなかったらあかん。足し算やない、掛け算や。間違いないで。掛け算やから、僕はプロゴルファーになれたんや。いくら才能や努力

の量が大きくても、感謝力が一以下やったら、減っていくわけやろ。才能もあり、努力もしてるのに、何年やってもプロテストに受からん若いもんがおるよ。あれは感謝力が足らん。ろくに挨拶もできないんやからね。才能や努力は僕が三なら彼らは一〇。だけど感謝力は僕が一〇なら彼らは〇・五。掛け算してみ。彼らが「一〇×一〇×〇・五〇〇」。僕は「三×三×一〇〇〇」。僕のほうが上に行くわけやんか。だから僕がプロテスト通って新人戦で三位を取ったわけや（笑）。

——感謝力が足りないのはなぜでしょう。

古市 やっぱり親の教育。ゴルフアーツって、小さい頃から親がつきつきりで教えてるケースが多いやろ。その中には、技術ばかり教えて心を教えない親がおんねん。技術はほかの専門家だつて教えられるよ。親は、親にしか教えられないことを教えるのが仕事や。

——古市さんはお孫さんができたときもずっと甘やかしてはいけないと、自分を戒めたとか。子供ならともかく、孫にまでそ

う思えるのはすごいですね。

古市 おれだつて孫を抱きたいんよ、だけど抱かない。そういうやり方を、僕はおやしから学んだ。どこにも連れて行ってもらったこととはないけど、おやしは僕のこと

「嫁はん」の支えあればこそ

——古市さんは家を焼け出され、偶然離れた駐車場に置いてあった愛車にゴルフバッグを積んでおかれたんでしたね。それが「プロテストを受けろ」という天の啓示だと思われた。ろくに練習できないままプロテストに合格されたのにも感動しましたが、奥様のバックアップが素晴らしかった。立派な奥様ですね。

古市 そんなことない、普通の嫁はん。

——いえ、震災後の混乱の最中、お金もないのにプロテストを受けたいと言ったら、普通奥さんから離婚届を突きつけられますよ（笑）。

古市 ま、遠征費用を工面してくれたのはありがたいことやった。その代わり、モノ言えへんねん。

を大きく見てくれとった。アマチュアゴルファーの中にはまだ若いうちからズルをするのもいるけど、あれは親が目先のことだけしか教えんからや。人間として大事なことを教えてないんやね。

最初プロテスト受けたいうたとき、二週間ぐらい無視（笑）。二週間目に、「お父さん、なんぼ要んのん？」って。金額言うたら、「そんなお金あれへんわ。また無視、沈黙。そして「一回だけやで、落ちたらガードマン行くん？」「働く」。ローンも払わなあかんのやから、そう言った。それで、落ちたんや。それもゴルフしてきて三〇年に一回というようなアンラッキーがあつて。で、僕は思った。「間違いないに来年は、三〇年に一回のラッキーを神様がくれる」。家に帰ってそう嫁はんと言ったら、怒った、怒った（笑）。一カ月、二カ月、モノ言えへんで。

——やっぱりそうですか（笑）。

古市 ドブへ金を捨てるようなもんやからね。でも翌年奇跡が起き



ふるいち・ただお ●1940年神戸市長田区生まれ。63年立命館大学経済学部卒。大学時代はボート部に在籍し厳しい練習に耐え抜いた。68年神戸市長田区鷹取商店街でカメラ店を開業。71年長田消防団に入団。95年1月17日、阪神・淡路大震災で自宅兼店舗が焼失。同年9月若松町11丁目自治会会長に就任し、街の復興に奔走する傍ら、2000年、59歳11カ月と24日という史上2番目の高齢でプロテストに合格。01年、その体験が『選歴ルーキー』（平山譲著）として本にまとも話題となる。昨年秋には、映画『ありがとう』全国公開。02年関西プロゴルフシニアで初優勝。05年日本プロゴルフシニア優勝。

いつも人間は天に試されている

た。今でも嫁はんと話すんよ。「夢見てるみたいやなあ」って。僕のことを書いた本を出してもらわうわ、自分でも本を出すわ、映画を撮ってもらわうわ。タイガー・ウッズさんとゴルフさせてもらわうわ。正直なところプロゴルファーの収入だけでは厳しいんやけど、辛い講演に呼んでもらえるんやね。ありがたいことや。この前も、地方から修学旅行に来た中学生の

前で講演したんよ。事前に映画を観てきてくれて、その上で僕の話を書いて。これ、見て。みんなが書いた感想文を送ってくれたんやけど、びっしり書いてるやろ。僕が強調した「感謝力の大切さ」を素直に感じ取ってくれたんやね。これが、親たち向けの講演になると、もうあかんわ。やっぱり「才能、努力、運」でどうにかなると思うとる。

——古市さんの「感謝力」はやはり、震災の体験によって培われたものですか。

古市 うん、震災のときにモノも

らって、「ありがとうございます」ぐらいはわかったんや。でもそれからずっと、何もなしに生活していったときに、自分の力はちっぽ

けやと身に沁みたんやね。友達が物資持ってきてくれたり、見舞金持ってきてくれたり、激励に来てくれた。友達のカンパで当座の生活をなんとかできたんや。うちは貯金らしい貯金なんてなかったもん(笑)。全国の人の支援に「ありがとうございます」が溢れます。「ありがとうございます」の人の支援に「ありがとうございます」の中に沁みこんでいったんやね。僕が生き残れたのはちよつとの偶然。それなら生き残った人間で素晴らしい町をつくるのが死んでいった人たちへの鎮魂や、供養や。この気持ちは生涯変われへん。

ある人に言われた。試されてるということだけを覚えてとけと。僕がプロゴルファーになったその時点でほかのことをぶつりやめ、町づくりをやめて、今後の人生ゴルフだけで行こうとしてたら、あの人生はなかった。正直言うて、こういうふうになったことで、妬みや嫉みはあるんよ。友達だと思っていた人が背を向けたり。寂しいな。だけど、それはしゃあない。まだ僕にはやらないかんことがあ

るからね。町づくりだつて途中や。

プロゴルファーが今日も朝起きて、子供の通学の見回りやつてまんねんで。そんなことしてるプロゴルファー、おらんやろ(笑)。

第二・第四日曜日はおじいちゃん、おばあちゃんたちが集まれるように「ふれあい喫茶」を町内の役員さんたちと運営する。第三日曜日は防災訓練。忙しいよ。

——古市さんの今後の夢についてお聞かせください。

古市 まず、ツアーで優勝しておじいちゃんおばあちゃんを山中温泉に連れていくこと。この辺は下町やから、みんな一緒に遊ぶのが大好き。震災の前からや。だから、バスを仕立ててみんなを連れていき、歌ったり踊ったりしてもらいたいんや。あとはエイジシユートをツアーで実現したいね。年齢と 同じか少ないスコアでまわってみたい。これ、今年で三二歳のタイガー・ウッズさんでは不可能やからね(笑)。

——夢の実現を願っております。今日はどうもありがとうございます。

聞き手／日本銀行情報サービス局長 恵谷英雄